

目次

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取り組み状況	1
(1) 学生の確保の見通し	1
ア) 定員充足の見込み	1
イ) 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要	3
ウ) 学生納付金の設定の考え方	6
(2) 学生確保に向けた具体的な取組状況	6
2. 人材需要の動向等社会の要請	7
(1) 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的(概要)	7
(2) 上記(1)が社会的・地域的な人材需要動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠	8

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取り組み状況

(1) 学生の確保の見通し

千葉大学大学院園芸学研究科は、平成 32 年度より既設の園芸学研究科を改組する。環境園芸学専攻では、現在の 3 コース（生物資源科学、緑地環境学、食料資源経済学の 3 コース）を再編し、本研究科のミッションに適合した園芸科学コースとランドスケープ学コースの 2 コース制をとる。

表1 園芸学研究科の定員

現: 園芸学研究科					新: 園芸学研究科			
専攻	コース	前期 定員	後期 定員		専攻	コース	前期 定員	後期 定員
環境園芸学	生物資源科学	105	18	⇒	環境園芸学	園芸科学	105	18
	食料資源経済学					ランドスケープ学		
	緑地環境学							

前期課程の入学定員は、表 1 のとおり、既設の園芸学研究科と同じく 105 名とする。後期課程の入学定員も既設の園芸学研究科と同じく 18 名とする。表 2（後述）の定員充足状況をもても、ここ数年はほぼ 100%以上を確保しており、定員を減少させる必要はないと判断した。これらの入学定員を長期的かつ安定的に確保できることを示すため、既設の園芸学部 4 学科と大学院園芸学研究科 1 専攻 3 コースにおける大学院進学率、入試状況及び就職状況を把握し、データの分析を行った。

ア) 定員充足の見込み

【博士前期課程】

図 1（後述）に、過去 5 年分の園芸学部卒業生の大学院進学率を示した。学部卒業生のほぼ 40%が卒業後、他大学も含めた大学院に進学している。そのほとんどは本学の園芸学研究科に進学している。他大学大学院への正確な進学者数は不明であるが、例年、ほんの数名である。現在の学部定員は 190 名であることから、この進学率が維持できれば、今後も 80 名程度の内部進学者を見込める。（資料 1）

表 2（後述）に、博士前期課程入試の志願状況および入学状況の推移を整理した。過去 5 年の志願倍率（志願者／定員）は、他大学からの受験生や留学生を含め、平均で 1.52 倍であり、いずれの年度も 1.4 倍を超えている。最終的な定員充足率については、100%を下回った年もあったが、過去 5 年の平均は 101.6%であり、直近では充足率は上昇傾向にある。表 2 に示した留学生の動向をみると、例年 30 名程度の留学生が受験し、20 名程度が入学している。特に緑地環境学コース（改組後のランドスケープ学コースに相当）では留学生の比率が高い。また、表 2 に国内の他大学からの入学者数も付記した。平成 28・29 年度のみデータであるが、概ね 20 名前後が入学している。留学生および他大学からの入学者数の多

さは、日本で唯一の園芸学に特化した大学院であるという本研究科のユニークさに対する学外からの期待の現れであると考えられる。このように園芸学部・学外双方よりコンスタントに志願者・入学者を集めていることから、今後も十分に学生を確保できると考える。

表3（後述）は、平成30年1・2月に実施した園芸学部在学学生に対する将来の進学ないし就職意向に関する調査の集計結果である。回答者数は221（定員の39%）、うち改組後最初の大学院入学生となる3年生の回答者数は148（定員の78%）であり、改組に直接関係する学生の意向を把握するには十分な数の回答を得ている。将来の選択肢を早くから一つに絞り込むことは難しいという現実的でもないので、可能性のある選択肢は複数選択することを可能として回答してもらった。回答学生の59%が将来の選択肢として千葉大学の大学院、具体的には園芸学研究科を選択しており、そのうち85%が環境園芸学を第一の専攻として回答している。これは定員190名（1学年）の50%、95名が本専攻への進学を希望していることを意味する。今後進学をあきらめる学生の出現も想定されるが、学生の意識面からみても、博士前期課程に多数の学生が集うことは期待できる（資料2）。

なお、改組後は近い将来、園芸学部に設けられている特別プログラム「園芸産業創発学プログラム」を修了する学部生の受け皿として、また国際性と経営・ビジネス感覚を併せ持つ高度職業専門人を目指す社会人のリカレント教育の場として、環境園芸学専攻園芸科学コース内に「国際園芸ビジネス学プログラム」を設置すべく検討中である。同プログラムへの入学が想定される社会人大学院生の受入れ可能性を探るため、千葉大学柏の葉キャンパスにて展開している植物工場コンソーシアムに加入している企業とコンソーシアムに関連する研修に参加した企業あわせて29社に対し実施したアンケートの結果を表4（後述）に示した。回答企業の90%は園芸科学コース修了生の採用に前向きな回答をしている。加えて、国際園芸ビジネス学プログラムにより社会人入試制度が整えられた場合は、4分の3の企業が同プログラムへの社員派遣を検討すると回答している。これまで博士前期課程においては社会人の入学は極めて少なかったが、今後は一定数の社会人入学も見込める。

上記の傾向を総合的に考えれば、改組後の環境園芸学専攻においても、これまでと同様あるいはそれ以上の受験生を期待でき、最終的には定員も十分充足できると考えられる。

【博士後期課程】

表5（後述）に、現・園芸学研究科博士後期課程の入試状況を整理した。博士後期課程における過去5年間の志願倍率は平均で1.5倍であり、倍率は上昇傾向にある。定員充足率においても、100%を下回った年もあるものの、過去5年間の平均は119%であり、充足率も上昇傾向にある。博士後期課程においては、留学生の占める割合が高く、年次変動はあるものの概ね入学者数のほぼ半数が留学生で占められている。加えて、国内他大学からも若干名の進学がある。したがって、今後も志願者数・定員充足率ともに定員の100%を上回る学生の確保が見込める（資料1）。

また先述した学部生に対する進路意向調査（表3）では、園芸学研究科・環境園芸学専攻への進学を検討している者に対し、博士前期課程修了後の希望する進路についても尋ねてい

る。回答者の17%が千葉大学大学院での博士後期課程を志望している。博士前期課程の定員105名の17%は18名であり、ちょうど博士後期課程の定員と一致する。学部生段階での希望であるため楽観視はできないが、学生の意識面からも定員に近い数の学生を学内で確保できると予想される（資料2）。

これらの結果を総合的に判断すれば、博士後期課程においても、定員を充足することは可能であると考ええる。

イ) 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

以下では、定員充足の見込みの説明に用いた各種統計データを列挙するとともに、個々の図表について補足説明を行う。

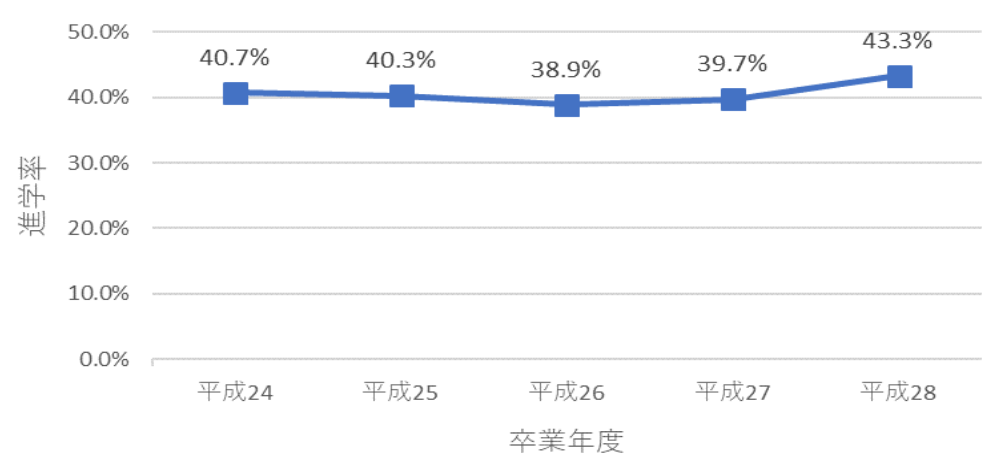


図1：園芸学部卒業生の大学院進学率

注) 企画政策課データより集計

図1は園芸学部卒業生の大学院進学率の推移である。学部生の進路は景気の影響を受けやすいが、それでも過去5年間、安定して40%程度の進学率を確保している。進学者数には他大学大学院への進学者数も含まれる。しかし毎年、他大学への進学は数名にとどまっており、ほとんどの学生が大学院園芸学研究科に進学している（資料1）。

表2 大学院園芸学研究科・博士前期課程の入試状況

年度	生物資源科学コース			食料資源経済学コース			緑地環境学コース			研究科全体					
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	定員	志願者数	合格者数	入学者数	志願倍率	定員充足率
平成25	81(4)	57(2)	48(2)	9(2)	7(1)	6(1)	62(13)	51(11)	43(12) *1	105	152(19)	115(14)	97(15)	1.45	92%
平成26	80(1)	61(1)	56(1)	16(3)	7(3)	6(3)	57(13)	47(11)	43(13) *2	105	153(17)	115(15)	105(17)	1.46	100%
平成27	82(7)	59(4)	50(3)	9(4)	7(3)	4(1)	64(21)	44(11)	38(11) *1	105	155(32)	110(18)	92(15)	1.48	88%
平成28	86(9)	69(7)	61(6) *1	8(1)	7(0)	6(0)	69(34)	56(26)	49(25) *2	105	163(44)	132(33)	116(31) [23]	1.55	110%
平成29	98(9)	80(9)	75(9) *2	8(4)	5(2)	5(2)	67(22)	49(18)	44(16) *2	105	173(35)	134(29)	124(27) [17]	1.65	118%
平均	85.4	65.2	58	10	6.6	5.4	63.8	49.4	43.4	105	159.2	121.2	106.7	1.52	101.6%

注) ()内は留学生の数, *はダブルディグリー学生の数, []内は国内他大学からの入学者数(ただしH28・29年度のみ)を示す

表2（前述）は既設の大学院園芸学研究科・博士前期課程の入試状況を統計的に整理したものである。過去5年間、志願倍率は1.5倍程度で推移している。学内の志願者だけでなく、大学院への進学を希望する留学生（多くは学部研究生として専門知識と語学能力を高めてから受験）や国内他大学からの志願者も集めている。国内でも園芸学に特化した研究科を持つ大学は本学のみであるため、園芸科学・ランドスケープを専門的に学ぼうとする意欲的な学生にとって、本研究科は魅力的な志願先となっている。

表3 園芸学部生の進学および就職に対する意向
（平成31年1・2月調査） 回答者数:221
【質問】現在検討している学部卒業後の進路は？（複数回答）

進路先	回答者数	構成比
千葉大学の大学院	130	59%
国内を主とする民間企業	130	59%
他大学の大学院	70	32%
官公庁	69	31%
海外展開する民間企業	53	24%
その他	51	23%

【千葉大学園芸学研究科への進学を検討中の学生への質問】
どちらの専攻を希望するか？（複数回答）

専攻名	回答者数	構成比
環境園芸学	110	85%
国際連携ランドスケープ学(JD)	27	21%

【環境園芸学専攻への進学を希望する学生への質問】
博士前期課程修了後の進路は？（複数回答）

進路先	回答者数	構成比
国内を主とする民間企業	94	86%
官公庁	46	42%
海外展開する民間企業	44	40%
千葉大学博士後期課程	18	17%
他大学の大学院	15	14%
海外企業	12	10%
その他	18	17%

先も多岐にわたるが、園芸学研究科・博士前期課程への進学という選択肢が最も多く選択されており、全体の60%近い回答を得ている。園芸学科と応用生命科学科（ともに園芸科学コースに対応）でその傾向が強く、続いて緑地環境学コースの希望者割合が高い。これらの学科では、専門性を発揮できる職種に就くことを希望する場合は、博士前期課程までの進学が

表3は、平成31年1・2月園芸学部在籍する1～3年生を対象に実施した進学・就職意向に関するアンケート調査の集計結果である。回答者数は221（定員の39%）、うち改組後最初の大学院入学生となる3年生の回答者数は148（定員の78%）であり、学生の意向を把握するには十分な数の回答を得ている。また、自身の進路について希望とはいえ簡単には特定の職種・進学先を特定することは難しいことから、複数回答を許容している（資料2）。

学部生とはいえ専門分野は多様であり、就職・進学

望ましいと考える学生が相当数いる。

表4: 国際園芸ビジネス学プログラムへの関心と社員派遣の可能性

【質問1】新専攻・園芸科学コースの修了生の採用への関心	回答率	【質問2】社会人入学制度への社員派遣の可能性	回答率
関心がある	69%	検討する	42%
やや関心がある	21%	検討してもよい	31%
どちらともいえない	7%	どちらともいえない	17%
あまり関心がない	3%	積極的には検討しない	10%
関心がない	0%	検討しない	0%

注)調査は平成28年に実施、29社回答。

表4は、平成28年、柏の葉キャンパスにてNPO法人植物工場研究会が中心となって進めている植物工場コンソーシアムの研修会等に参加している民間企業お

よび団体 29 社の担当者に対し、園芸科学コースにて設置を検討中の「国際園芸ビジネス学プログラム」の構想を説明し、同プログラム修了生への採用意向と社会人入学の可能性を尋ねた結果である。構想中であったにもかかわらず、修了生の採用意欲は高く、社会人入学制度を活用した技術者等の学び直しにも前向きな回答が得られた。現在、こうした意向を反映させるべく、国際園芸ビジネス学プログラムの履修体系ならびに社会人入試の方法について検討を行っている（資料 3、4）。

表5 大学院園芸学研究科・博士後期課程の入試状況

	生物資源科学コース			食料資源経済学コース			緑地環境学コース			研究科全体					
年度	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	定員	志願者数	合格者数	入学者数	志願倍率	定員充足率
平成25	15(5)	15(5)	15(5)	1(1)	1(1)	1(1)	9(1)	9(1)	8(1)	18	25(7)	25(7)	24(7)	1.5	119%
平成26	12(6)	10(6)	8(5) *1	3(1)	3(1)	3(1)	10(4)	9(4)	5(3)	18	25(10)	22(10)	16(8)	1.39	89%
平成27	10(3)	6(3)	6(3)	0	0	0	15(9)	11(7)	11(7)	18	25(12)	17(10)	17(10)	1.39	94%
平成28	8(3)	6(3)	6(3)	2(1)	2(1)	2(1)	16(11)	15(10)	15(10)	18	26(15)	23(14)	23(14) [4]	1.44	128%
平成29	16(11)	14(11)	14(11)	0	0	0	18(8)	13(7)	13(7)	18	34(19)	27(18)	27(18) [3]	1.89	150%
平均	12.2	10.2	9.8	1.2	1.2	1.2	13.6	11.4	10.4	18	27.0	22.8	21.4	1.5	119%

注) ()内は留学生の数, *はダブルディグリー学生の数, []内は国内他大学からの入学者数(ただしH28・29年度のみ)を示す

表 5 は、既設園芸学研究科・博士後期課程の入試状況を統計的に整理したものである。前期課程と同様、過去 5 年間で 1.5 倍程度の志願倍率を維持している。定員充足率は前期課程を上回り、平均で 120%程度である。充足率が 100%を下回った年もあるが、これは平成 20 年代前半、博士後期課程進学者の増加により定員充足率が極めて高くなり、その是正を求められたため、研究実績のある社会人（公的研究機関の職員、民間企業の研究職等）の入学希望者に対し、論文博士の申請を促し、博士後期課程への入学を再検討するよう依頼した結果であって、志願者はコンスタントに存在すると理解できる（資料 1）。

次に、環境園芸学専攻を構成する二つのコースの状況を個別に述べる。既設園芸学研究科は生物資源科学／食料資源経済学／緑地環境学の 3 コースで構成されていたが、改組後の研究科では生物資源科学コースと食料資源経済学コースを統合し、新たに園芸科学コースを立ち上げる。緑地環境学コースはランドスケープ学コースに再編される。

1) 園芸科学コース

本コースは、現在の生物資源経済学コースと食料資源経済学コースが統合して新設されるコースで、園芸産業の基礎となる植物生産技術、食品機能に関する科学と生産物の流通・消費に関わる社会科学的研究を横断的に学べる点に特色がある。表 2（前述）によれば、既設両コースの過去 5 年の博士前期課程平均入学者数は 63.4 であった。これに対し志願者数平均は 95.4 で、入学者数に対する志願倍率は 1.50 倍となる。同様に博士後期課程（表 5）の志願倍率を試算すると 1.22 倍となる。前期・後期とも、コース単独でも定員充足は十分可能である。

表 2 および表 5 をみると、現・生物資源科学コースでこれまで少なかった留学生の入学者

が増加している。これは園芸学研究科が海外協定校との交流に力を入れた結果、特にアジア諸国より優秀な学生が入学するようになったためである。その中にはダブルディグリー締結校の学生も含まれる。

また園芸科学コースでは、近い将来、社会人受入れを重視した国際園芸ビジネス学プログラムの設置を検討しているが、同プログラムの設置後は、先述のとおり、柏の葉キャンパスを核として展開する植物工場関係コンソーシアムに関わる企業の技術者による社会人学生としての大学院入学もある程度期待できる。平成 28 年には日本農業の国際化の鍵と期待されている農林水産省の施設園芸産業化革新ネットワーク拠点にも採択されており、関係する企業・団体からの社会人入学も期待できる。

以上の理由から、本コース単体でも十分に学生を確保できる見通しが立っている。

2) ランドスケープ学コース

本コースは、既設の緑地環境学コースが対応している。同コースの過去 5 年間の平均入学者数は博士前期課程 43.4、後期課程 10.4 であった（表 2 および表 5）。先述の園芸科学コースの場合と同様にコース内の志願倍率を試算すると、前期課程 1.47 倍、後期課程 1.31 倍となる。前期・後期とも過去の実績からは十分に学生を確保できる見通しが立つ。

ランドスケープ学分野の近年の入学者の特徴として、留学生が多いことがあげられる。その理由としては、日本の庭園への関心が世界中で高まっており、当該分野を学ぼうとする留学生が多いこと、早くから同分野では英語プログラム教育や協定校とのダブルディグリープログラムを用意してきたため、留学生にとって比較的学びやすい環境が整えられつつあることがあげられる。

ウ) 学生納付金の設定の考え方

学生納付金は、国立大学等の授業料その他の費用に関する省令に基づき、本学が定める国立大学法人千葉大学における授業料その他の費用に関する規程に基づき設定する。

(2) 学生確保に向けた具体的な取組状況

本専攻が目指す人材育成像、それを達成するための特徴あるカリキュラム、特徴ある研究内容等を紹介するために、速やかにホームページに改組の記事を掲載する。同時に、詳細なパンフレット等を作成し、学内外へ配布する。また、大学院進学・入学説明会を開催し、改組の趣旨を説明するとともに、本大学院の魅力をアピールしていく。

留学生の進学者が多いのも本研究科の特色である。アジアを中心に世界各地にある協定校にも積極的に新研究科の概要をアピールし、海外の優秀な学生の確保に努める。

博士後期課程においては、社会人進学者も一定数ある。そこで学部卒業生・博士前期課程修了者で専門的な職種についている者に働きかけ、より高度な専門的知識・技術の習得をめざす意欲的な社会人学生の確保に努める。共同研究等で連携関係にある千葉県周辺の企業・

団体にも働きかけ、学位取得が求められる高度職業専門人の受入れを強化する。

2. 人材需要の動向等社会の要請

(1) 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

園芸学研究科が養成する人材は、植物科学を基盤とし、園芸ないしランドスケープに関する学識を深め、安全安心な「食」と持続可能で美しい「環境」の実現を目指し、それらに関する社会の多様な課題に対し、広い視野に立って理論的かつ実践的に対応でき、国際的に活躍できる高度専門職業人あるいは先導的な研究者である。

このような人材を育成するための園芸学研究科の教育研究上の目的は、持続可能な地球環境の下に社会的な繁栄を求めつつ、健康な環境において全ての人間に尊厳ある豊かな生を実現すべく現代社会の課題群に对应していくことを目指し、以下に示した知識・能力を修得した人材を養成することである。以下の4つの目的は、研究科の「学位授与方針」にも反映されている。

- ①「理論と実践」を旨とする伝統を踏まえ、園芸とランドスケープに関する社会の複雑な課題や科学的課題に対して、高い倫理観を伴いつつ柔軟に対応し、主体的に行動できる力
- ②国内外の多様な文化や価値観の理解の上に、他者に自らの考えを伝え、国内外の社会と連携して活動できるコミュニケーション能力
- ③園芸とランドスケープに関する体系的知識・技能・思考方法と学際的で幅広い視野をあわせ持ち、課題解決や新たな価値の創出に貢献できる柔軟な思考力と深い洞察力
- ④関連分野の高度な知識・能力を現場の問題に応じて統合・整理し、他者と協働し、問題解決に導ける力

上記の目的を達成するためには、学部教育については、学問体系の異なる伝統的な4学科体制を保持しつつ、大学院博士前期課程では、現行の3コースを学際的に社会課題に応じた2コースに統合させ、幅広く科学の先端を学ぶと同時に、園芸をめぐる関連産業間の広いまとまりの中で社会関与を高めた実践教育を行い、コンピテンスの確立を促すことによって、柔軟な応用を可能にする高度な人材を育成することができると考える。大学院博士後期課程では、園芸学からランドスケープ学さらには他の研究科・学府にわたる幅広い視野を持てるよう1専攻体制を維持し、園芸に関する専門的知識・能力に加え、技術経営力やイノベーション力を養成し、科学技術の社会実装を実現できるトータルエキスパートを育成する。

(2) 上記(1)が社会的・地域的な人材需要動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

表6 千葉大学農学分野の「ミッションの再定義」(抄)

【強みや特色, 社会的な役割】

(前文)

千葉大学は、古くから日本の園芸産業の中心として発展してきた千葉県に設立され、園芸学に特化した専門的な教育研究を推進する我が国唯一の高等教育機関として、国内のみならず、アジアを中心とした海外における園芸産業の振興や人材育成において中核的な役割を果たすとともに、園芸とランドスケープ分野で世界的に高水準の教育と研究を目指して国際化および社会貢献に取り組んでおり、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。

(強み・特色の具体例: 表記方法は一部略)

- ・「食と緑」をめぐる多様な課題に対応できる高度な専門人材および先導的な研究人材の育成
- ・国内のみならずアジアの拠点として園芸分野を牽引し、グローバルに活躍できる人材を育成
- ・遺伝育種・植物工場等に代表される施設園芸等の業績を基礎に、高付加価値植物の作出・生産システムの開発等の先端的研究で我が国の園芸学をリードするとともに、ランドスケープ分野でも関連分野との連携を進め、特色ある研究を推進
- ・全国の自治体の環境・農業に関連する各種委員会への参画、被災自治体の支援実績等を生かし、都市緑化、持続可能なまちづくり、園芸産業、農業の振興に寄与
- ・社会人受入れの実績を生かし、先端的な人材育成のためのプログラムを構築し、社会人の学びなおしと園芸産業の振興に寄与
- ・アジア諸国の交流協定校と連携し、これまでの英語プログラム等の共同事業を充実させた多面的な連携教育プログラムを開始し、アジア園芸産業の発展と人材育成に寄与

表7 園芸学研究科修士生の就職状況(博士前期課程)

業種	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29
農業・林業	2%	2%	6%	10%	6%
建設業	12%	20%	19%	15%	19%
製造業	17%	23%	29%	26%	29%
電気ガス水道業			1%		
情報・通信業	8%	4%	4%	5%	10%
運輸業		4%	1%		2%
卸売・小売業	9%	4%	7%	3%	2%
金融・保険業	1%	1%	1%	3%	
不動産業	3%		3%	3%	3%
学術専門・技術サービス業	8%	8%	3%	10%	7%
教育・学習支援業	3%	6%	1%	3%	3%
医療・福祉業		1%		1%	2%
サービス業	9%	4%	1%	6%	1%
公務	27%	23%	23%	15%	16%
その他	1%		1%		
小計	100%	100%	100%	100%	100%
就職率	86%	92%	91%	92%	87%

表6に、千葉大学農学分野(園芸学研究科・園芸学部)の「ミッションの再定義」より、強みや特色・社会的役割にまとめられた内容の一部を示す。前文では、これまでの教育・研究の蓄積をふまえ、園芸作物に関する研究およびランドスケープ研究において世界的にも高水準の教育・研究水準を確保し努力している旨が要約されている。具体的な強み・特色として、「食と緑」というキーワードに関連する課題に対応できる専門的な人材の育成、グローバルに活躍できる人材の育成、園芸およびランドスケープ分野での特色ある研究の推進、地域社会との連携、社会人教育の推進、アジア諸国の協定校と連携した新たな教育プログラムの創出をうたっている。ここにまとめられた事項は、国際的な状況・動向、我が国における当該分野の状況、社会的ニーズ等を踏まえたものであり、今回の改組を企図するにあたっての前提としている。

表7は、既設園芸学研究科・博士前期課程修士生の就職状況を整理したものである。就職希望者(進学希望者は除く)に対する就職率は過去5年間、概ね90%を確保しており、高水準にある。園芸学の学際性を反映し、

就職先は多岐に渡るが、比較的多くの学生が就職先に選んでいるのは建設業、製造業、公務員の3つである。建設業には総合建設業（ゼネコン）に加え、建設・造園に関する設計事務所、緑化企業、環境評価やランドスケープ設計に関するコンサルタント事務所が含まれ、実際に緑地環境学コース（新：ランドスケープ学コース）の学生が多く就職している。製造業では、食品・飲料メーカー、農業機械・農薬等の農業資材メーカー、医薬品・化学製品・化粧品メーカーへの就職が比較的多い。いずれも研究科に属する各研究分野の専門性を活かせる業種である。公務員の多くは大学院生の場合、国家公務員／地方公務員とも、専門職（農学職、造園職、林業職）にて採用されるケースが多く、採用後は農業普及指導員や林業・造園の技術職など、学部卒の公務員に比べ専門性を発揮できる職場で活躍する修了生が多い（資料1）。

このように、就職先は多岐に渡るが、概ね研究科で身に付けた専門性を活かせる職種に就いており、研究科の目的は達成されているといえる。今回の改組でもより専門性を高めた教育プログラムを準備している。

表8は、園芸学研究科・博士後期課程修了生の就職状況を表7と同様に整理したものである。大学での若手教員採用が減少しているという厳しい状況を反映し、就職率はやや前期課程を下回るものの、80%程度を維持している（資料1）。

後期課程修了生の場合、研究者となることを目指す学生が多

表8 園芸学研究科修了生の就職状況(博士後期課程)

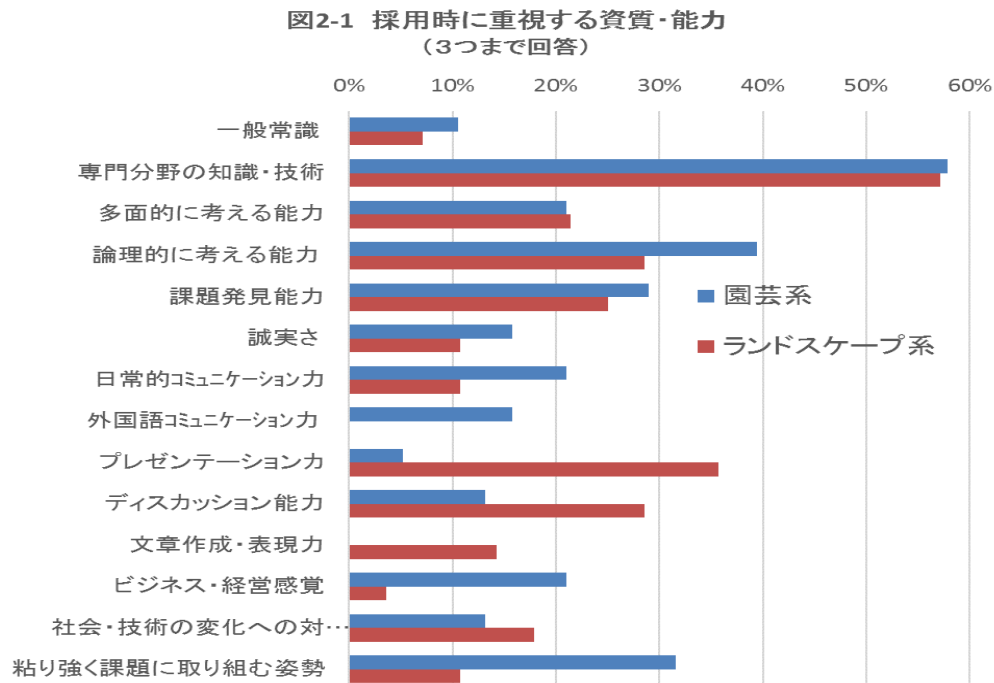
業種	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29
農業・林業			7%		
建設業		10%	8%		25%
製造業				16%	
学術専門・技術サービス業	22%	37%	38%	15%	
教育・学習支援業	56%	32%	31%	54%	50%
医療・福祉業		5%			
サービス業		5%	8%		
公務	22%	11%	8%	15%	25%
その他					
小計	100%	100%	100%	100%	100%
就職率	82%	89%	100%	72%	100%

いため、就職先も前期課程よりさらに専門性の高い業種を希望するとともに、採用側も専門性の高い業務を想定して採用することが多い。そのため学術専門・技術サービス業に分類される公的研究機関の研究職や民間企業の総合研究所レベルでの研究員採用、また教育・学習し円行に分類される大学教員としての採用の割合が高い。公務員も専門職としての採用が一定数ある。

最後に、園芸学研究科修了生が就職することが想定される企業・団体の人事担当者を対象に、研究科学生に対する期待および評価を尋ねるアンケート調査の集計概要を以下に示す。調査は平成29年1・5・6月と平成30年6月、園芸学研究科修了生を採用した実績のある企業・団体および就職説明会等で来校しており採用意欲のある企業・団体の人事担当者に調査票を郵送し、記入の上返送いただく形で実施し、67社の回答を得た。このうち、緑地環境学（ランドスケープ学）コースの修了生を主に採用している企業・団体を「ランドスケープ系」（29社）、それ以外の企業・団体を「園芸系」（37社）と区分して集計した（資料3、4）。

図2-1（後述）は、企業・団体が採用時に重視する学生の資質・能力の構成比である（重要なもの3つまで回答）。園芸系／ランドスケープ系双方から共通して求められている資

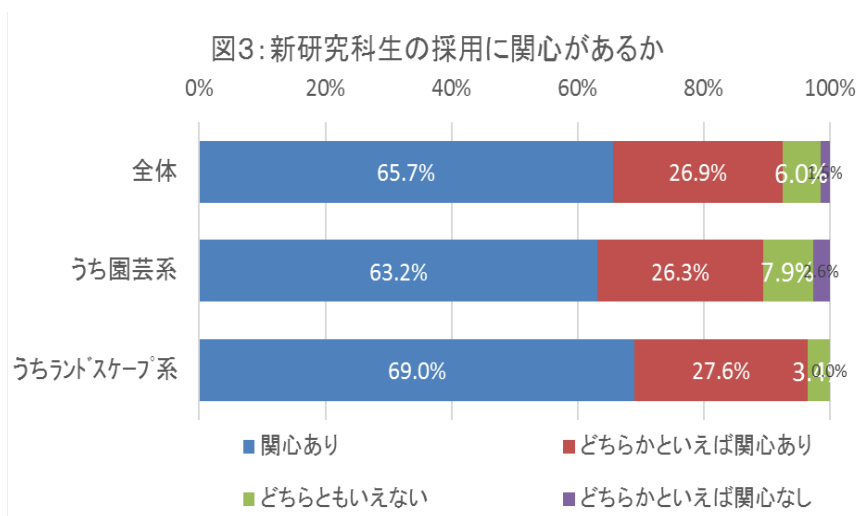
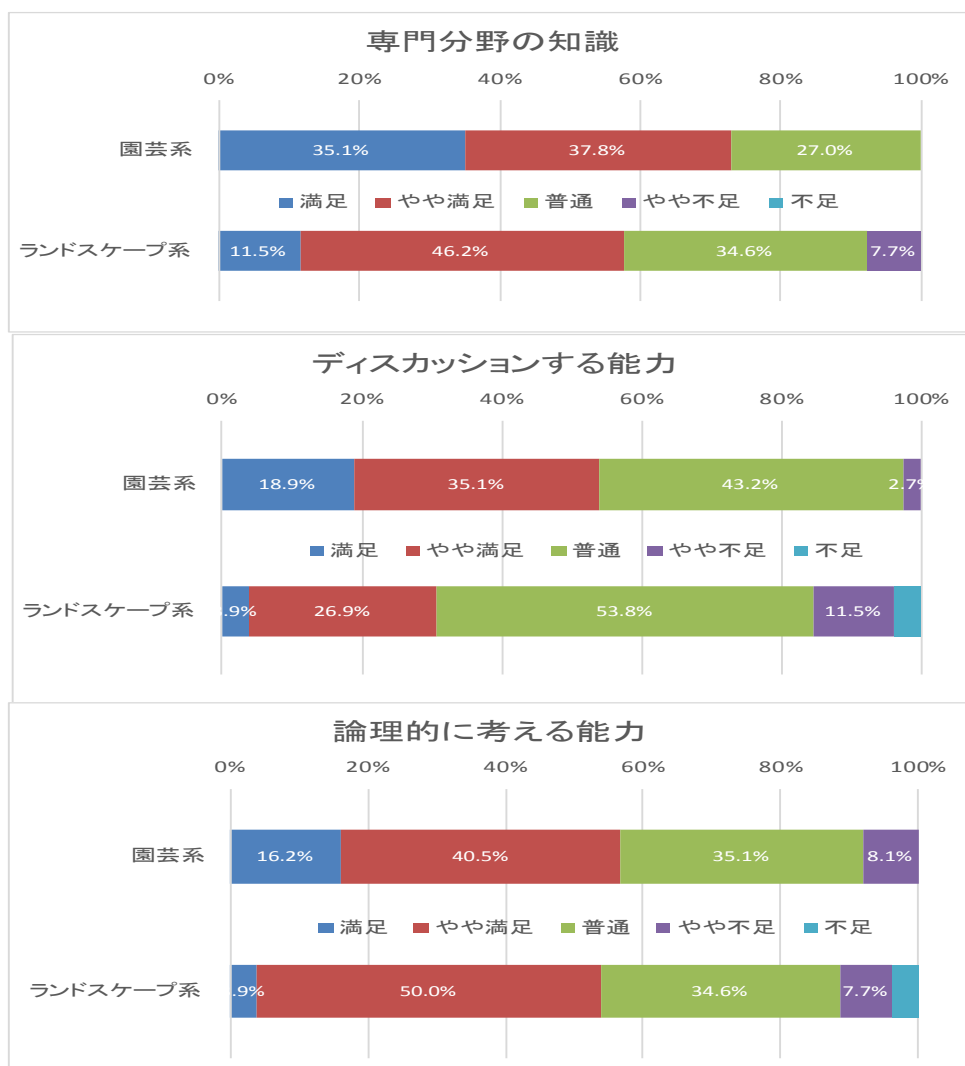
質・能力は、専門分野の知識・多面的思考力・課題発見能力の3点であった。今回の改組に当たっても、両コースとも専門科目の見直しと必修化により、専門知識の習得や課題発見力の醸成に努めている。



その一方、企業風土により求める資質・能力が異なることも観察された。園芸系企業では、論理的思考力・ビジネス感覚と粘り強さをより求める傾向にある。園芸科学コースでは、講義系科目の再編を図りつつも研究室ないし教員単位での修士論文作成に向けた特別演習の重要性も保持するカリキュラム構成としている。また検討中の国際園芸ビジネス学プログラムでは、インターンシップを重視することとしている。ランドスケープ系企業では、表現力・ディスカッション力・プレゼンテーションに関連する能力を求める傾向がみられる。そのためランドスケープ学コースでは、プロジェクト演習科目を強化し、上記能力を日常的に鍛錬できるカリキュラムとなっている。

次に図2-2（後述）は、回答企業の担当者による園芸学研究生修了者の能力評価（一部）である。平均的な採用者の能力と比較した相対評価であるが、園芸系企業に比べ、ランドスケープ系企業の担当者が、修了生に厳しい評価を下している。特にコミュニケーション力にも関連するディスカッション力に対する評価が低い。そのためランドスケープ学分野では、改めてプロジェクト演習科目の強化を図り、演習の場を通じてコミュニケーション能力を高めることを目指している。

図 2-2 園芸学研究科修了生への能力評価

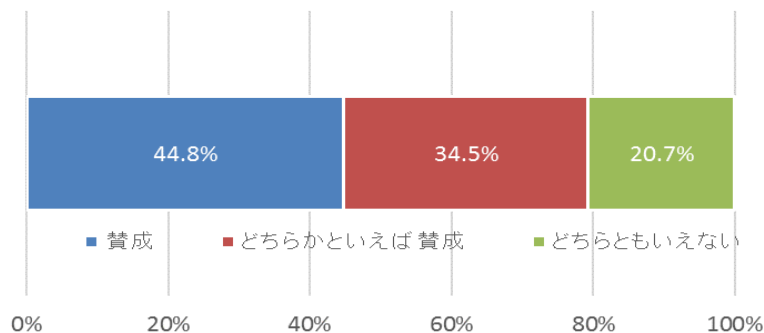


今回の改組のポイントを資料で説明したうえで、改めて園芸学研究科修了生の今後の採用意向を尋ねると、図 3 のとおり、園芸系／ランドスケープ系とも、ほぼ 90%の企業・団体が採用に関心ありと

回答している。アンケートの自由回答欄の記述や、アンケート実施後に個別に実施した企業・団体の代表ないし人事担当者に対するヒアリングにおいても、新たな必修科目の整備と体系的な履修システム、ランドスケープ学コースにおけるプロジェクト演習をはじめとしたPBL科目の充実といった今回の改組における教育プログラムの改善点に対しては、賛同や期待を述べる意見が多かった。今回の改組の要点、特に教育プログラムの改善点に対し、採用側企業は概ね賛同を示し、より高い能力を身に付けた修了生の採用に意欲的であると判断できる。

ランドスケープ学コースを修了した学生に対しては、改組後は新たな学位「修士（ランドスケープ学）」が授与される予定である。この新しい学位の授与についてランドスケープ系企業の評価を伺ったところ、図4のとおり、ほぼ80%の企業が賛成であった。個別の自由回

図4: 修士(ランドスケープ学)の授与について



答および事後ヒアリングでは、ランドスケープを冠した学位の方が専門性を強調でき、国際的通用性も高いことが多く指摘された。これもランドスケープ学分野におけるより実践的かつ体系的な教育プログラムの改善に対する評価の現われと考えられる。

加えて言うならば、「理工系人材育成戦略」（文部科学省：H27.3.13）においては、労働力人口の減少の中で、付加価値の高い理工系人材の戦略的育成の取組の重要性、大学と産業界の認識のギャップを埋めた高等教育の改善、実践的なプロジェクト型教育の導入が謳われている。また、「第5期科学技術基本計画」（総合科学技術・イノベーション会議：H28.1.22）においても、重要政策課題として上がった13の課題のうちに、持続的な成長と地域社会の自律的発展のための「食料の安定的な確保」や「持続可能な都市及び地域のための社会基盤の実現」、国及び国民の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活の実現のための「自然災害への対応」や「食料安全、生活環境、労働衛生等の確保」、地球規模課題への対応と世界の発展への貢献のための「地球規模の気候変動への対応」「生物多様性への対応」等、本研究科に関連するテーマが上がっており、社会ニーズを的確に捉えたオープンイノベーションを推進する仕組みの強化が謳われている。これらは、IoTを活用し、社会との結びつきの強化を目指している園芸学研究科の人材育成の目的とも合致するものである。

資料目次

資料1	過去5年間の入試状況および就職状況	1
資料2	学生向けアンケート調査	5
資料3	企業向けアンケート調査	7
資料4	企業向けアンケート調査票	13

入試状況(博士前期課程)

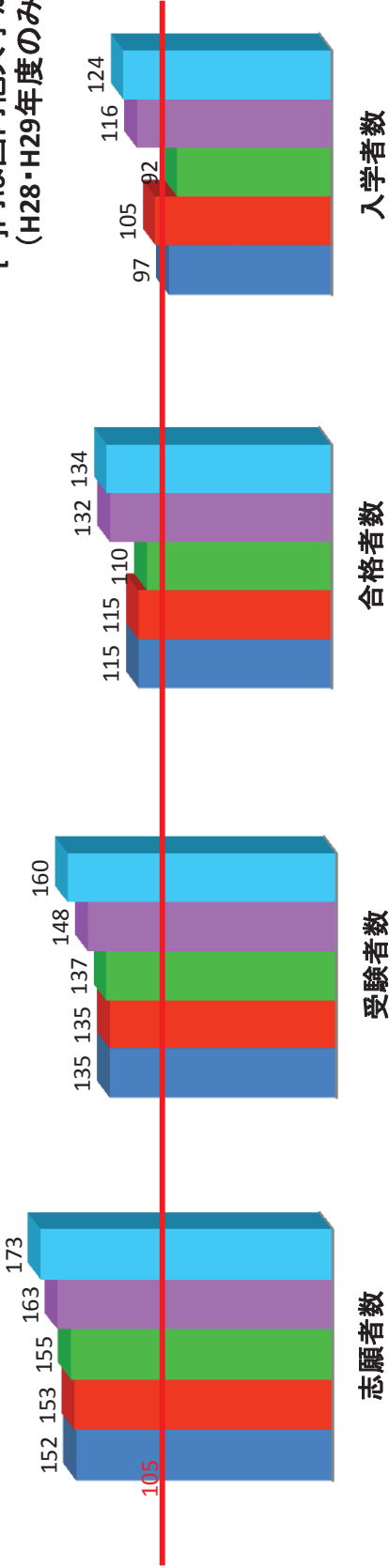
(過去5年入学定員，志願者，受験者，合格者，入学者数)

資料 1

環境園芸学専攻 (博士前期課程)	生物資源科学コース			緑地環境学コース			食料資源経済学コース			合 計			
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	定員	志願者数	合格者数	入学者数
													定員 充足率
平成29年度	98(9)	80(9)	75(9) ※2	67(22)	49(18)	44(16) ※2	8(4)	5(2)	5(2)	105	173 (35)	134 (29)	124 (27) [17]
平成28年度	86(9)	69(7)	61(6) ※1	69(34)	56(26)	49(25) ※2	8(1)	7(0)	6(0)	105	163 (44)	132 (33)	116 (31) [23]
平成27年度	82(7)	59(4)	50(3)	64(21)	44(11)	38(11) ※1	9(4)	7(3)	4(1)	105	155 (32)	110 (18)	92 (15)
平成26年度	80(1)	61(1)	56(1)	57(13)	47(11)	43(13) ※2	16(3)	7(3)	6(3)	105	153 (17)	115 (15)	105 (17)
平成25年度	81(4)	57(2)	48(2)	62(13)	51(11)	43(12) ※1	9(2)	7(1)	6(1)	105	152 (19)	115 (14)	97 (15)
平 均	85.4	65.2	58	63.8	49.4	43.4	10	6.6	5.4	105	159.2	121.2	106.7

平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度

()内は留学生数 ※ダブルディグリー学生
[]内は国内他大学からの入学者数
(H28・H29年度のみ把握)

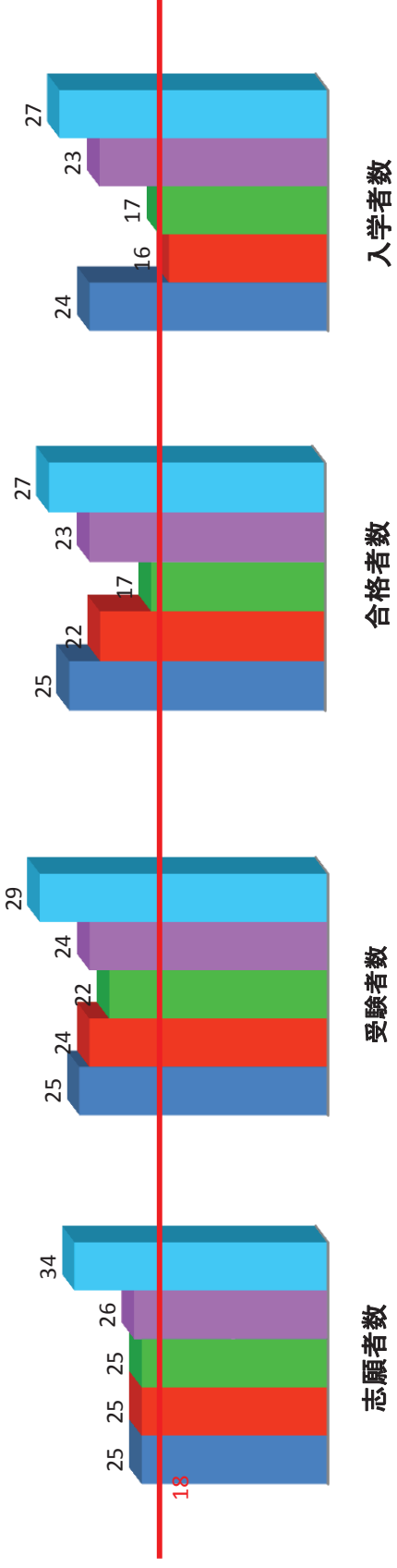


入試状況(博士後期課程)

(過去5年入学定員，志願者，受験者，合格者，入学者数)

環境園芸専攻 (博士後期課程)	生物資源科学コース			緑地環境学コース			食料資源経済学コース			合 計				
	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数	定員	志願者数	合格者数	入学者数	定員 充足率
平成29年度	16(11)	14(11)	14(11)	18(8)	13(7)	13(7)	0	0	0	18	34(19)	27(18)	27(18) [3]	150%
平成28年度	8(3)	6(3)	6(3)	16(11)	15(10)	15(10)	2(1)	2(1)	2(1)	18	26(15)	23(14)	23(14) [4]	128%
平成27年度	10(3)	6(3)	6(3)	15(9)	11(7)	11(7)	0	0	0	18	25(12)	17(10)	17(10)	94%
平成26年度	12(6)	10(6)	8(5) ※1	10(4)	9(4)	5(3)	3(1)	3(1)	3(1)	18	25(10)	22(10)	16(8)	89%
平成25年度	15(5)	15(5)	15(5)	9(1)	9(1)	8(1)	1(1)	1(1)	1(1)	18	25(7)	25(7)	24(7)	133%
平 均	12.2	10.2	9.8	13.6	11.4	10.4	1.2	1.2	1.2	18	27.0	22.8	21.4	119%

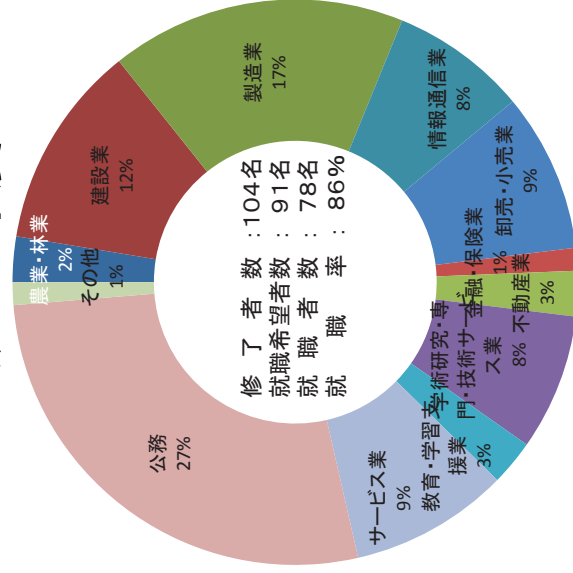
■ 平成25年度 ■ 平成26年度 ■ 平成27年度 ■ 平成28年度 ■ 平成29年度 () 内は留学生数 ※ダブルディグリー学生
[]内は国内他大学からの入学者数 (H28・H29年度のみ把握)



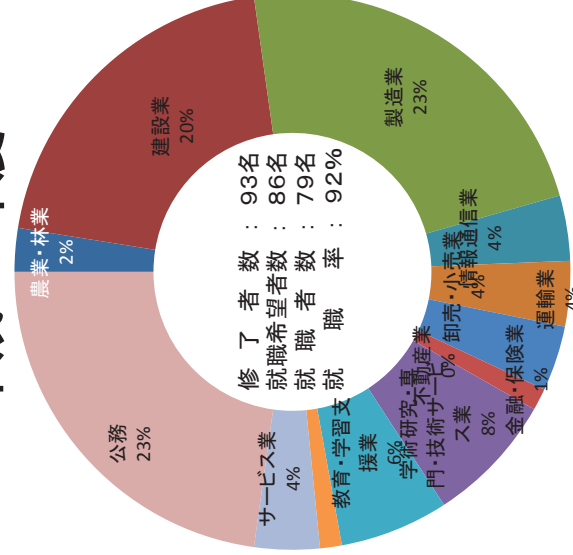
就職状況(博士前期課程)

(過去5年就職率，業種別，主な就職先)

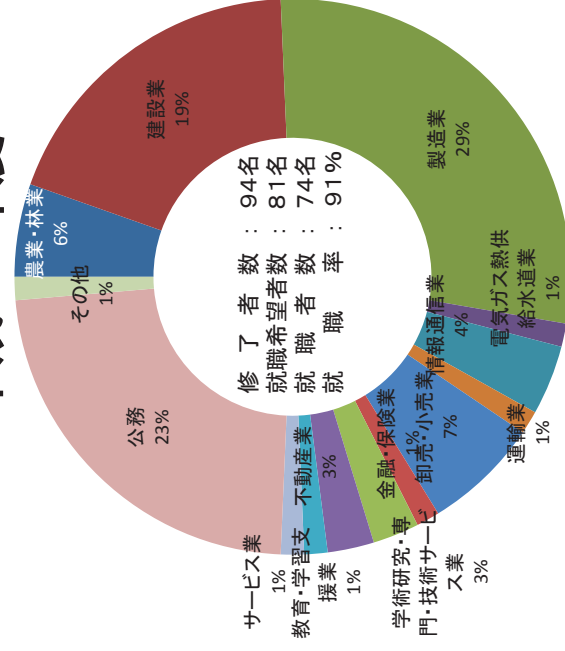
平成25年度



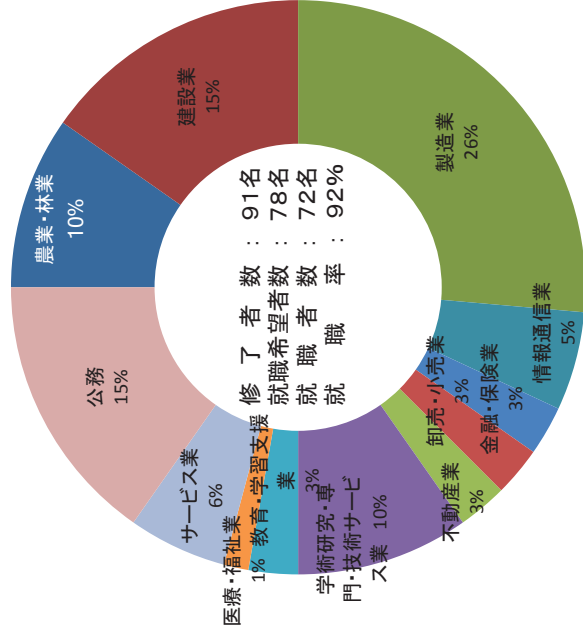
平成26年度



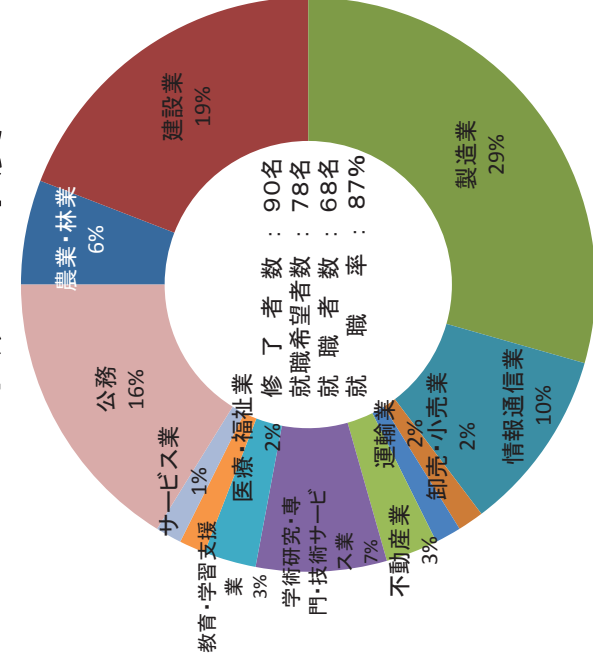
平成27年度



平成28年度



平成29年度



※建設業には、総合建設業、ランドスケープコンサルタント。環境・防災コンサルタント、建設コンサルタント、造園設計事務所、建築設計事務所、ハウスメーカー、造園建設業、緑化企業が含まれる。

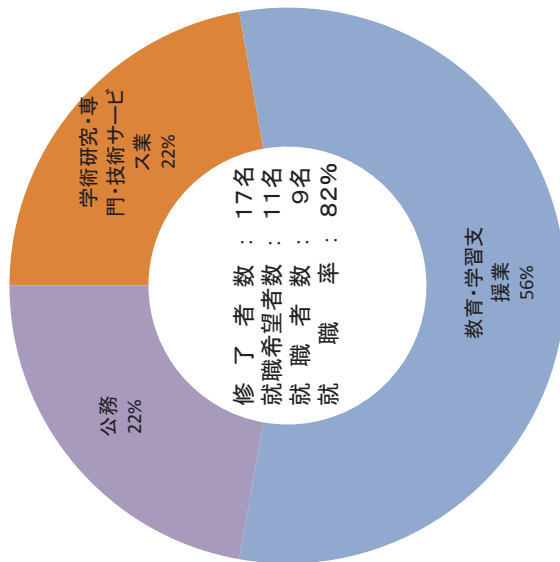
※製造業には、食品・飲料、農薬、医薬、化学、機械、化粧品 of 各製造業が含まれる。

※公務員の多くは専門職(国家：農林科学・農業農村工学・森林自然環境、地方：農業、造園、林業)で採用

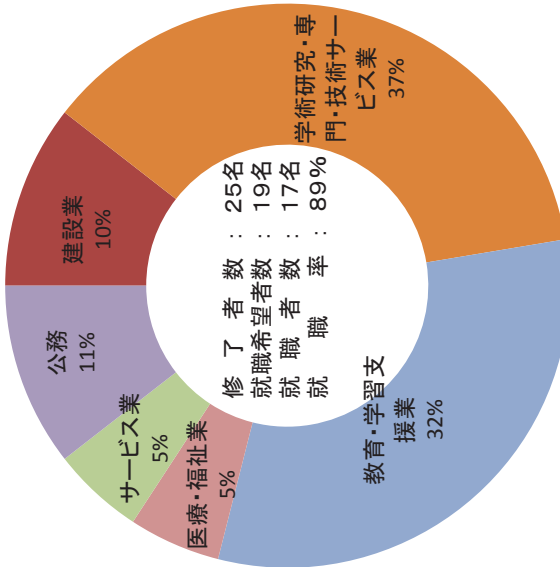
就職状況(博士後期課程)

(過去5年就職率, 業種別, 主な就職先)

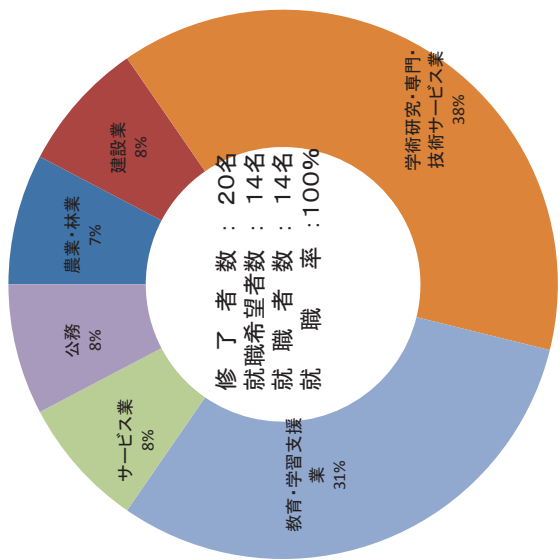
平成25年度



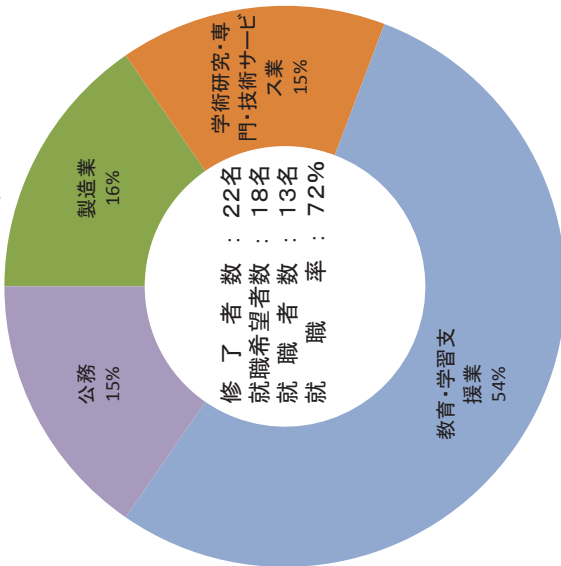
平成26年度



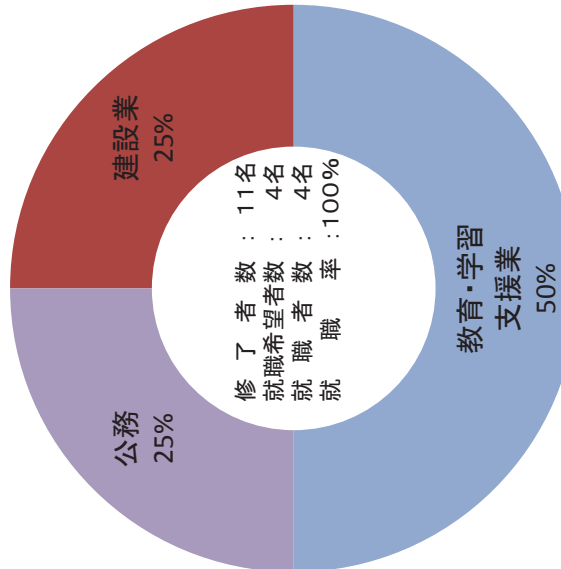
平成27年度



平成28年度



平成29年度



※建設業には、総合建設業、ランドスケープコンサルタンツ。環境・防災コンサルタンツ、建設コンサルタンツ、造園設計事務所、建築設計事務所、ハウスメーカー、造園建設業、緑化企業が含まれる。

※製造業には、食品・飲料、農薬、医薬、化学、機械、化粧品などの各製造業が含まれる。

※公務員の多くは専門職(国家:農林科学・農業農村工学・森林自然環境、地方:農業、造園、林業)で採用

大学院改組についての学生意向アンケート調査

対象：園芸学部 1～3年生

調査時期：平成31年1月末(1～3年)・2月中旬(3年生のみ)

回答者数：221名(1年：41 2年：32 3年：148)

回答率：38%(1年：21% 2年：16% 3年：76%)

- ・ 回答はいずれも複数選択可⇒回答率合計は100%を超える
...一つの選択肢に絞り切れない学生を考慮して

問：学部を卒業後、考えている進路は？ n=221

選択肢	回答者数	割合
千葉大学の大学院(園芸学研究科)	130	58.8%
国内を主とする民間企業	130	58.8%
他大学の大学院	70	31.7%
官公庁	69	31.2%
海外に展開する民間企業	53	24.0%
海外の大学院	20	9.0%
海外の企業	13	5.9%
自ら起業	11	5.0%
教員	5	2.3%
その他	2	0.9%

* 6割近い学生が園芸学研究科への進学を希望している

大学院進学に対するニーズ：学生アンケートより

問：（園芸学研究科への進学を考えている学生に対して）

どちらの専攻に関心があるか？ n=130

選択肢	回答者数	割合
環境園芸学専攻	110	84.6%
国際連携ランドスケープ学専攻（JD）	27	20.8%

- ・ ジョイントディグリー専攻は申請予定

問：（環境園芸学専攻への進学を考えている学生に対して）

どちらのコースに関心があるか？ n=110

選択肢	回答者数	割合
園芸科学コース	87	79.1%
ランドスケープ学コース	35	31.8%

- ・ 両コースとも一定の希望あり

問：（園芸学研究科への進学を考えている学生に対して）

博士前期課程修了後の進路は？ n=130

選択肢	回答者数	割合
国内を主とする民間企業	94	72.3%
官公庁	46	35.4%
海外に展開する民間企業	44	33.8%
博士後期課程（園芸学研究科）	18	13.8%
他大学の大学院	15	11.5%
海外の企業	12	9.2%
海外の大学院	8	6.2%
その他	4	3.1%

- ・ 学部生時点で博士後期課程への進学を考える学生も一定数あり

改組に関する企業・団体向け アンケート調査の概要

資料3

【調査対象】園芸学研究科修了生が就職している企業、または研究科の就職支援セミナーに参加している企業・団体（公務を含む）

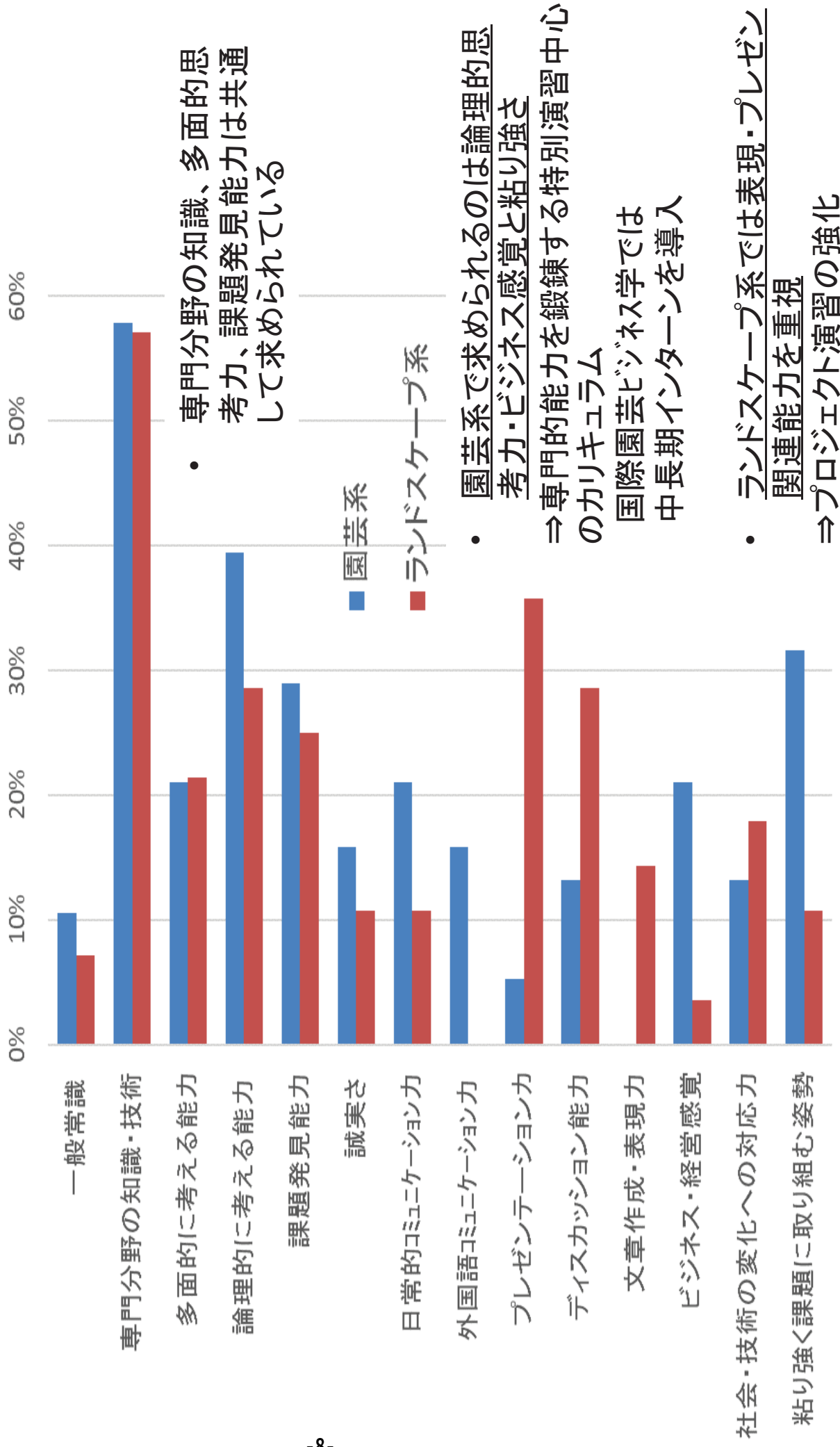
園芸系：38社 ランドスケープ系：29社

【調査期間】平成29年1・5・6月，平成30年6月

【調査方法】

- ・ 該当企業の人事担当者または幹部に記入いただく自記式アンケート調査
- ・ 一部企業・団体に対しては幹部にインタビュー調査を実施

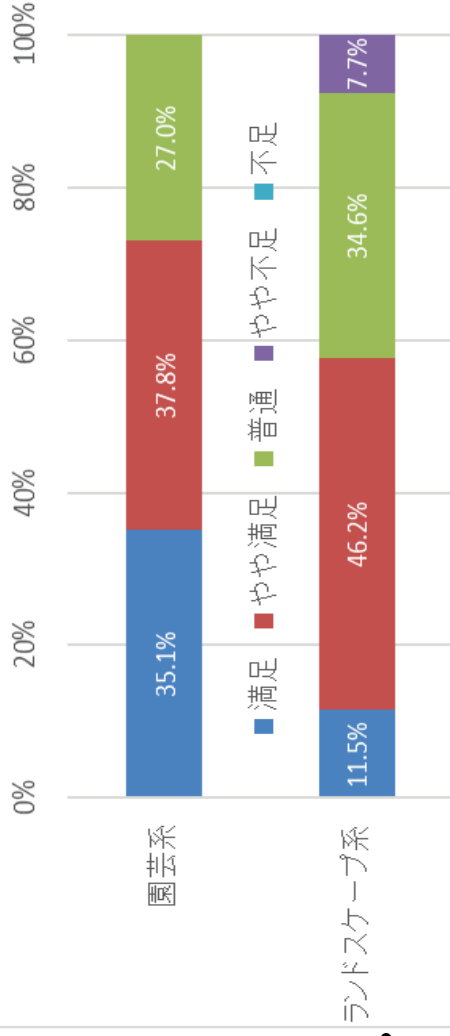
修士生に対し学部生以上に求める能力は？（3つまで回答）



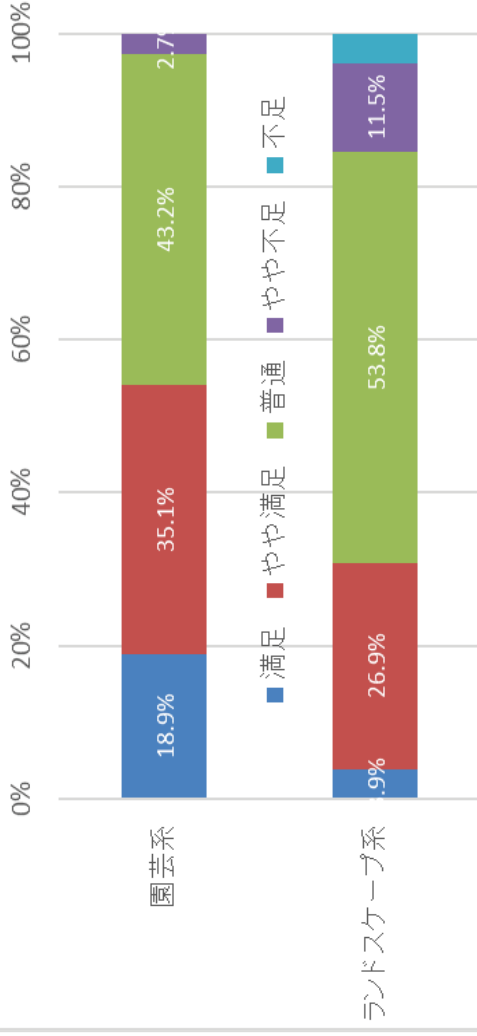
園芸学科修士了生の能力は？

：企業等の評価

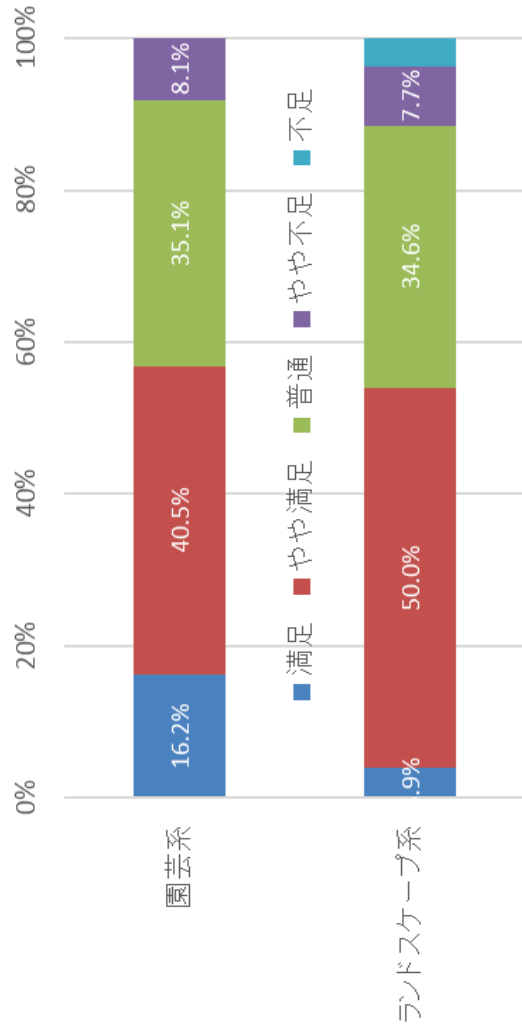
専門分野の知識



ディスカッションする能力



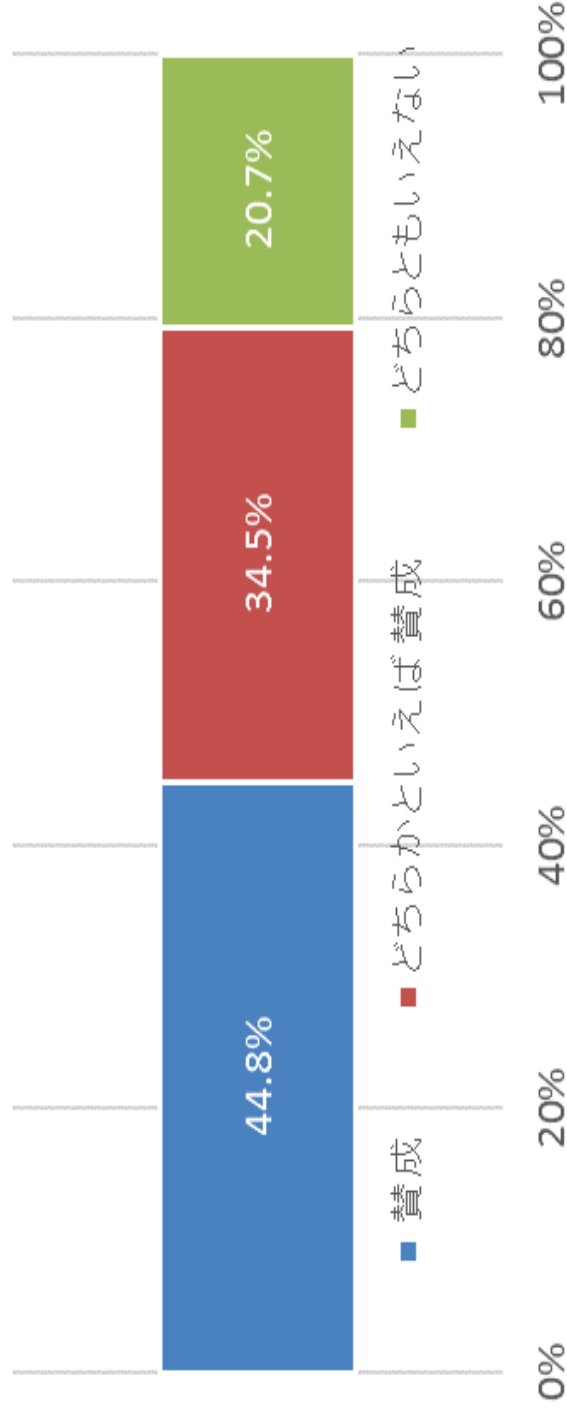
論理的に考える能力



- ・ランドスケープ系修士了生の評価がやや低い
 - ・特にディスカッション力, つまりコミュニケーションに関する能力の評価が低い
- ⇒ プロジェクト演習を強化

修士（ランドスケープ学）の授与について

修士（ランドスケープ学）の授与について



- およそ8割が新学位の授与に賛成

【コメント欄より】

- ・ 国際的に通用性の高い学位・資格が求められる
- ・ グローバルなチームの中で連携して活動する上で必要
- ・ 職業上の立場が明確になる
- ・ 国内外のプロジェクトにてひとつの基準となると予想される

園芸系企業・団体からの意見 (自由回答&インタビュより)

学際性の確保

- ・現場対応のため、専門に加え幅広い知識を身につけるべき(施設園芸)
- ・ビジネスの現場では多面的に高度技術を展開することが必要(電器メーカー)
- ・専門性と共に横断的な関係を築ける人材の育成を(種苗)

理論と応用双方を...

- ・基礎に加え応用的な研究・教育もいかりとやってほしい(種苗)

英語による教育の強化

- ・海外業務が増えており英語での専門的コミュニケーションが必要とされる(種苗)
- ・海外の技術や情報を取り入れる必要性がさらに高まっている(農協団体)
- ・業務上、コミュニケーションツールとして不可欠になっている(食品メーカー)

コース共通科目の設定

- ・ゲノム解析のセミナーは高頻度で開催されており、必須内容(資材メーカー)
- ・高度な専門知識を複数の分野で醸成する共通科目が必要(建設業)

専門性の強化

- ・大学院に進学する以上、そこで得られる専門性は高くなければ(外食)

国際園芸ビジネス学プログラム(計画中)

- ・専門とビジネス双方を学ぶことに期待(種苗)
- ・技術開発と経営を並行して学び展開することは大切(電器メーカー)

ランドスケープ系企業・団体からの意見 (自由回答&インタビューより)

学際性の確保

- ・ランドスケープ学は旧造園学よりも幅広く地域を捉える学問(環境コンサル)
- ・専門性の深耕と併せ、学際的な周辺領域を学ぶことが重要(総合建設業)

英語による教育の強化

- ・ランドスケープデザインは文化の壁を超えて価値観を共有できる(総合建設業)
- ・海外プロジェクトも手掛けており、英語は業務上必須である(総合建設業)

ランドスケープ学の学位について

- ・ニーズは高く、MLAホルダーはコンペで加点されることも(総合建設業)
- ・学生の動機付け・能力形成につながるのでは(地方自治体)
- ・MLAは国際標準である(コンサルタント)

園芸系との違い

- ・隣接分野だが業務内容は異なるので教育体系も分けるべき(コンサルタント)

プロジェクト演習科目の充実

- ・専門性と実践性を兼ね備えれば即戦力になる(法面緑化企業)
- ・学外の企業等と連携した演習を必修化する点を評価(造園・都市デザイン)
- ・欧米ではスタジオ科目が充実し、修了した人材のニーズも高い(総合建設業)

ジョイントデグリー・プログラム(申請予定)

- ・アジアのランドスケープを世界に発信するリーダーになってほしい(総合建設業)
- ・経済発展著しいインドネシアの名門大学との連携は有益(総合建設業)

大学院園芸学研究科改組案の概要

【改組の必要性】

園芸関連産業（園芸ビジネス）では、安全で高付加価値な園芸作物や食品への需要が高まるとともに、遺伝子レベルの先端科学の進歩が顕著です。こうした変化に対応し、わが国農業最大の成長分野である園芸ビジネスを国際展開できる人材の育成が求められています。

地域・都市の環境を育むランドスケープ関連産業では、成熟社会における人の健康需要が高まるとともに、地球環境問題や巨大災害への対応が求められています。このような課題に対処し、ビッグデータを活用して地域をデザインし、環境を管理・経営できる人材の育成が求められています。

千葉大学大学院園芸学研究科は、これまでも「食と緑」をキーワードとし、国内のみならずアジアの園芸学分野の教育・研究拠点として、高付加価値植物の作出、園芸分野を支える先端的研究、さらに学内の他分野と連携した特色あるランドスケープ研究を進めてまいりました。

しかし昨今の園芸・ランドスケープ両分野における高等教育の国際競争が激しさを増すなか、アジアの研究トップリーダーの地位を維持するためにも、以下の取り組みを強化する必要に迫られています。

- ・ 生命科学や植物工場をはじめとする園芸関連科学技術の進歩や、急速なグローバル化、攻めの農政に対応できる園芸産業人の育成
- ・ 災害の多発化とわが国社会の成熟化、アジア圏諸国における経済発展にともなう開発の進行に対応できるランドスケープ専門家の育成
- ・ 高い国際通用性を持ち、課題解決を図れる文理融合した高等教育カリキュラムの整備
- ・ キャリアパス形成をサポートする科目と支援体制の構築（特に博士後期課程）
- ・ 大学全体の教育研究リソースを幅広く活用できる仕組み
- ・ 社会の需要を的確に捉え、カリキュラムを継続的に検証し改善を図るための仕組みづくり

【改組のポイント】 ** 資料の最後に付した図もご参照ください **

1) 教育・研究組織の再編

- 従来の環境園芸学専攻に加え、後述するジョイントディグリー・プログラムに対応した「国際連携ランドスケープ学専攻」を設置し、2専攻体制に再編します。
- 大学院教育は園芸学研究院所属の教員を中心とし、関連分野の研究院所属の教員にも一部参加してもらい、総合大学の持つ幅広い教育リソースを利用した柔軟な大学院教育を目指します。

2) 環境園芸学専攻のカリキュラムを大幅に再編

- 従来の3コース制（生物資源科学コース、緑地環境学コース、食料資源経済学コース）を、園芸科学コースとランドスケープ学コースの2コース制に改めます。
- 専攻共通科目を設け、研究リテラシー、アカデミックライティングの能力を強化するとともに、インターンシップの促進（海外も含む）を図ります。
- コース毎にも必修科目を設け、園芸学・ランドスケープ学それぞれを学ぶ学生が身につけるべき専門能力を高め、高度職業専門人としての素養を高めます。
- 園芸科学コースでは、よりミクロな園芸学の基礎となる園芸ゲノム情報論、遺伝資源利用学と、

技術の社会実装の必要性やそのポイントを学ぶ園芸技術開発論を必修とします。

- ランドスケープ学コースでは、ランドスケープ構造・機能論、ランドスケープデザイン論、プロジェクト演習を必修とし、課題と関連する専門科目と結びつけて履修することによって、の専門的知識を身につけるとともに、実践的能力を高めます。

3) 園芸科学コースの教育内容

- 従来の生物資源科学コースと食料資源経済学コースのカリキュラムを再編成し、文理融合的カリキュラムを用意します。
- 必修となるコース共通科目では、植物生産から加工・流通・消費に至る園芸システム全体を鳥瞰できる視座を養います。
- コース内に「国際園芸ビジネス学プログラム」を立ち上げます。同プログラムでは、園芸科学コースの通常科目に加え、プロジェクト演習科目、ビジネス関連科目や中長期のインターンシップ、英語科目を強化し、園芸技術と経営能力の双方を身につけ、国際的な舞台にも立てる園芸産業エキスパートの育成を目指します。すでにスタートしている「園芸産業創発学プログラム（学部の履修生を受け入れるとともに、社会人向けの独自入試も実施し、園芸産業に携わる技術者・経営者の学びなおしを支援します。

4) ランドスケープ学コースの教育内容と修士（ランドスケープ学）：MLA の授与

- 緑地環境分野のプロジェクト演習を必修化し、課題解決型のプロジェクトベース教育（PBL）を強化するとともに、関連する千葉大学内の他研究科が提供する建築学・デザイン学・環境リモートセンシング学等の関連科目を学べる体制をつくり、地球環境から地域の緑地まで総合的なデザイン能力をもったランドスケープ技術者の育成を目指します。
- 海外のプログラムも参考にしながら、これまでの緑地環境学コースより多めの授業科目と演習を課し、より高度な技術者育成を目指した教育を実施します。
- 同コースを修了した学生には、国際通用性の高い学位である修士（ランドスケープ学）：MLA を授与します。MLA は海外のランドスケープ系大学がすでに授与しており、ランドスケープ分野の国際標準となりつつある学位です。

5) ジョイントディグリー（JD）・プログラムの創設

- ジョイントディグリーとは、二つの大学（海外も含む）が連携して特色ある教育プログラムを用意し、双方の大学でプログラムを履修した学生に対し、両大学より共通の学位（今回は修士号）を授与する仕組みです。
- 東南アジアの農学・植物科学研究をリードするインドネシアのボゴール農科大学とともに「国際連携ランドスケープ学専攻」を設置し、国際レベルのランドスケープ高度専門職業人教育を行い、アジア圏の国際共同高等教育を牽引します。
- ボゴール農科大学はインドネシアにおける農学系大学のトップ校で、熱帯の植物学・生態学に強みを持っています。園芸学研究科は都市園芸、工学系科目や公共政策関連の科目も学べる点に強みを持っています。双方の強みを活かした教育プログラムを用意し、受講させることで、アジアの経済発展とともに求められる自然環境と調和し、安全で歴史文化も踏まえた持続可能な都市づくりに貢献できる国際派の人材を養成します。
- 実現すれば、日本の農学系大学では初の JD プログラムとなります。

6) 英語プログラムによる教育を全コースに拡大

- これまで主に留学生向けに整備してきた複数の英語教育プログラムを再編し、新設のコースすべてで受講できるようにします。
- 英語で授業する科目および英語対応可能な科目のみで修了できる体制を確立して留学生への便宜を図るとともに、日本人学生の英語発信能力向上も目指します。
- これまで実施してきた英語プログラムのひとつである植物環境デザインングプログラムを融合理工学府（理学および工学研究院）・国際教養学部（平成 28 年度発足）と連携して再編し、「植物環境イノベーションプログラム」を立ち上げます。その際、海外提携大学とのダブルディグリーも促進します。

7) その他

- 博士後期課程は現行の 1 専攻体制を維持しますが、キャリア教育を充実させます。チューター制度を設け、博士号取得後の修了生の社会適応力を強化し、幅広い分野で活躍できるよう支援します。

図 構想中の園芸学研究科・博士前期新課程のあらまし

博士前期課程環境園芸学専攻	
園芸科学コース	ランドスケープ学コース
育成する人材像 生命科学を深く理解しながら、社会の仕組みを理解し、実学的センスを持って、市民の「生活の豊かさ」の向上に貢献することができる 農業・食品分野の高度専門職業人 生命科学を中心とした専門知識と論理的思考力・技術力を育む専門科目 修了要件単位数: 30	育成する人材像 持続可能性、生物多様性保全、防災といった都市と地域の緑地環境に求められている複合的課題を解決し、市民生活の質と地域の魅力の向上に貢献できる 環境・建設分野の高度専門職業人 総合的な環境創造力を育む専門科目 修了要件単位数: 34
研究:特別演習Ⅰ、特別研究Ⅰ	研究:特別演習Ⅰ、特別研究Ⅰ
必修科目: 園芸ゲノム情報論、遺伝資源利用学、園芸技術開発論 選択科目: 園芸ゲノム育種学、生命機能化学、生物相互作用科学、園芸食品システム学、園芸産業システム学、食料資源経済学、コンサルタント演習 等	必修科目: ランドスケープ製造・機能論、ランドスケープデザイン論、プロジェクト演習1~2 選択必修科目: プロジェクト演習3、都市緑地計画学、都市生態学、自然風景計画学、景観生態学、景観文化論、緑地工学、緑地環境評価学、環境健康学、環境リモートセンシング 等
園芸系技術者・研究者の共通基礎をつくり国際性を育む基盤科目	
必修科目: 研究方法と倫理 選択科目: アカデミックライティング、国際インターンシップ、園芸グローバルセミナー	

国際連携ランドスケープ学専攻(10・11ページ)
(シヨイントディグリー)

千葉大学大学院園芸学研究科 教育再編に関するアンケート

(園芸関連産業向け)

平成 29 年 5・6 月実施

ご回答にあたって・・・

- 同封の「改組の概要」と「説明スライド(抄)」をご参照ください。

ご回答日： 平成 29 年 月 日

質問 1：貴社が大学院修士課程修了生を採用する場合、学部卒業生と比較して、重視する点は何でしょうか。ご担当者のご意見に最も近いものを 3 つまで選び、○印をつけてください。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| ① 一般常識 | ⑪ プレゼンテーション力 |
| ② 基礎学力 | ⑫ ディスカッションする能力 |
| ③ 専門分野の深い知識・技術 | ⑬ 文章作成・表現力 |
| ④ 多面的に考える能力 | ⑭ 情報処理能力・リテラシー |
| ⑤ 論理的に考える能力 | ⑮ ビジネス・経営に対する感覚 |
| ⑥ 課題発見能力 | ⑯ 社会・技術の変化に対応する能力 |
| ⑦ 想像力 | ⑰ 粘り強く課題に取り組む姿勢 |
| ⑧ 誠実さ | ⑱ 決断力 |
| ⑨ 日常的なコミュニケーション能力 | ⑲ 責任感 |
| ⑩ 外国語コミュニケーション能力 | ⑳ その他() |

質問 2：千葉大学大学院園芸学研究科修了生は、質問 1 であげられた点のうち、下記の項目を満たしているとお考えでしょうか。お答え下さい。

1) 専門分野の深い知識・技術

ア 満足 イ どちらかという満足 ウ 普通 エ どちらかという不足 オ 不足

2) ディスカッションする能力

ア 満足 イ どちらかという満足 ウ 普通 エ どちらかという不足 オ 不足

3) 論理的に考える能力

ア 満足 イ どちらかという満足 ウ 普通 エ どちらかという不足 オ 不足

質問 3：今後再編される園芸学府・環境園芸学専攻・システム園芸学コースを修了した学生（修士）の採用に関心がありますか？

ア 関心ある イ どちらかという関心ある ウ 普通 エ どちらかという関心ない オ 関心ない

質問4：システム園芸学コースでは、園芸ゲノム情報論、遺伝資源利用学と園芸技術開発論をコースの必修科目とし、生命科学の最新の専門知識と技術の社会実装に向けたポイントを教育する予定です。このような科目構成に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい。

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

質問5：システム園芸学コースでは、上記の必修科目を設定するとともに、最先端の極めて専門性の高い個別選択科目も充実させ、より専門性を高めた高度職業人の育成を図る計画です。このような教育方式に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい。

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

質問6：システム園芸学コースでは、多くの英語科目を用意する予定です。このような教育に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

質問7：システム園芸学コース内に、学位プログラムとして「国際園芸ビジネス学学位プログラム」を設置します。同プログラムでは、ビジネス系科目と英語対応科目を充実させるほか、企業または柏の葉キャンパスに展開する関連分野の多様な教員・専門家のネットワークを活かした実践的教育（中長期インターンシップを含む）を進める予定です。このような学位プログラム設置に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

質問8：国際園芸ビジネス学プログラムでは、在職しながら履修できる社会人大学院入試制度を検討しており、植物工場をはじめとする先進的な園芸技術や経営について集中的に履修できる社会人の「学び直し」の場を提供することを計画しています。このような学位プログラムが設置された場合、あなたの会社・団体では、職員の派遣あるいは職員の履修許可を検討する余地がありますか。

ア 検討する イ できれば検討したい ウ とちらともいえない エ 積極的には検討しない オ 検討しない

質問9：システム園芸学コースでは、飛び級入学生（学部・応用生命化学科で導入予定）やそれに準ずる研究職志望の優秀な学生を対象にした博士前期・後期一貫教育プログラム「植物機能開発学プログラム（仮称）」を構想中です。同プログラムでは、産学共同研究に参加させながら企業の研究開発部門ですぐに活躍できる人材を早期育成することを目指しています。このようなプログラムを設けることに賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい。

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

質問10：今回の改組計画につきまして、何かお気づきの点・ご要望などございましたら以下の欄にご自由にお書きください。

【最後に】よろしければ、貴社・貴団体の主な業務内容をご記入ください。

（これは大まかな業種別の集計を行う際の分類に使います。具体的業種名や社名・団体名を特定することはありませんのでご安心ください。）

* 以上でアンケートは終了です。長時間にわたりご記入いただきありがとうございました。*

千葉大学大学院園芸学研究科 教育再編に関するアンケート

(ランドスケープ・造園系)

平成 30 年 6 月実施

ご回答にあたって・・・

- 同封の「改組の概要」をご参照ください。

ご回答日： 平成 30 年 月 日

質問 1：貴社が大学院修士課程修了生を採用する場合、学部卒業生と比較して、重視する点は何でしょうか。ご担当者のご意見に最も近いものを 3 つまで選び、○印をつけてください。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| ① 一般常識 | ⑪ プレゼンテーション力 |
| ② 基礎学力 | ⑫ ディスカッションする能力 |
| ③ 専門分野の深い知識・技術 | ⑬ 文章作成・表現力 |
| ④ 多面的に考える能力 | ⑭ 情報処理能力・リテラシー |
| ⑤ 論理的に考える能力 | ⑮ ビジネス・経営に対する感覚 |
| ⑥ 課題発見能力 | ⑯ 社会・技術の変化に対応する能力 |
| ⑦ 想像力 | ⑰ 粘り強く課題に取り組む姿勢 |
| ⑧ 誠実さ | ⑱ 決断力 |
| ⑨ 日常的なコミュニケーション能力 | ⑲ 責任感 |
| ⑩ 外国語コミュニケーション能力 | ⑳ その他() |

質問 2：千葉大学大学院園芸学研究科修了生は、質問 1 であげられた点のうち、下記の項目を満たしているとお考えでしょうか。お答え下さい。

1) 専門分野の深い知識・技術

ア 満足 イ どちらかという満足 ウ 普通 エ どちらかという不足 オ 不足

2) ディスカッションする能力

ア 満足 イ どちらかという満足 ウ 普通 エ どちらかという不足 オ 不足

3) 論理的に考える能力

ア 満足 イ どちらかという満足 ウ 普通 エ どちらかという不足 オ 不足

質問3：今後再編される環境園芸学専攻・ランドスケープ学コースを修了した学生（修士）の採用に関心がありますか？

ア 関心ある イ どちらかというに関心ある ウ 普通 エ どちらかというに関心ない オ 関心ない

質問4：ランドスケープ学コースでは、地球環境から地域の緑地まで視野に入れて、自然科学的基礎と技術を教授するランドスケープ構造・機能論、人文社会科学的側面と計画・デザインを教授するランドスケープデザイン論、行政や企業と連携したプロジェクト演習をコースの必修科目とし、ランドスケープ分野で求められる国際標準の専門的知識を教育する予定です。このような科目構成に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい。

ア 賛成 イ どちらかというに賛成 ウ どちらかというに反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

[]

質問5：ランドスケープ学コースでは、上記のように国際標準の必修科目を設定するとともに、実践的なプロジェクト演習と関連づけた専門性の高い個別選択科目を組み合わせるカリキュラムを構成し（モジュール）、専門性と実践性を兼ね備えた高度職業人の育成を図る計画です。このような教育方式に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい。

ア 賛成 イ どちらかというに賛成 ウ どちらかというに反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

[]

質問6：ランドスケープ学コースでは、多くの英語科目を用意する予定です。このような教育に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい

ア 賛成 イ どちらかというに賛成 ウ どちらかというに反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

[]

質問7：ランドスケープ学コースの修了生には、国際的にも通用性の高い学位である修士（ランドスケープ学）：MLA を与える予定です。修士（ランドスケープ学）の創設と授与に賛成でしょうか？理由も含めてご記入下さい。

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

[]

質問8：ランドスケープ学分野では、東南アジアのランドスケープ教育研究の拠点の一つであるボゴール農科大学（インドネシア）と連携し、熱帯域を含む経済発展著しいアジア圏の国際的な地域環境づくりのリーダーになりうる高度専門職業人を育成するためのジョイントディグリープログラムを立ち上げる予定です。そのため新たに「国際連携ランドスケープ学専攻」も設置します。このような新プログラム並びに新専攻立ち上げに賛成でしょうか。理由も含めてご記入ください。

ア 賛成 イ どちらかという賛成 ウ どちらかという反対 エ 反対 オ どちらとも言えない

その理由

[]

質問9：今回の改組計画につきまして、何かお気づきの点・ご要望などございましたら以下の欄にご自由にお書きください。

[]

【最後に】よろしければ、貴社・貴団体の主な業務内容をご記入ください。

（これは大まかな業種別の集計を行う際の分類に使います。具体的業種名や社名・団体名を特定することはありませんのでご安心ください。）

[]

* 以上でアンケートは終了です。長時間にわたりご記入いただきありがとうございました。*